

聖書：ピリピ 4：21～23

説教題：主イエス・キリストの恵み

日時：2017年6月25日（朝拝）

ピリピ人への手紙の最終回となりました。昨年10月から約8ヵ月間、ここまで読んでまいりました。今日残されているのは最後の挨拶と祝祷です。まずパウロは「キリスト・イエスにある聖徒のひとりひとりによろしく伝えてください。」と記します。これは手紙の受取人であるピリピ人たちのことです。注目させられるのは「聖徒」という言葉です。ここにクリスチャンとは「聖徒」あるいは「聖なるもの」であると言われていきます。私たちは自分がそう呼ばれたらどうでしょうか。戸惑い、恐縮し、一体誰のことを呼んでいるのか。もし私のことならそう呼ばないでほしい。むしろ私は罪人です、という方を好むかもしれません。しかし聖書が語るこの言葉を用いないのは大変もったいないことです。

この「聖徒」あるいは「聖なるもの」の第一の意味はご存知のように「聖別された」とか「区別された」というものです。旧約でイスラエルは「聖なる国民」と呼ばれました。それは彼らが特別に聖い民であったからではなく、神に取り分けられた民であったからです。ですから新約で私たちが「聖徒」と呼ばれる時も、私たちがどれくらい道徳的に聖いかが考えられているのではなく、神によってどのような者とされたのかが考えられているわけです。すなわちキリスト・イエスにあってこの世から取り出されて神のものとした。このことを感謝して私たちは自分たちを「聖徒」と呼んで良いのですし、また神をほめたたえつつそう呼ぶべきなのです。

このことを受け止める時、私たちの生き方は定まって来ます。今、「聖徒」とは神へ取り分けられた者たちの意味だと述べました。言い換えればこのことは、私たちはもはや自分自身のものではないということです（Iコリント6章19～20節）。ですから聖徒とされたことを感謝する者は神に自らをささげる歩み、すなわち神の御言葉に従う歩みへと自らをささげなければなりません。またここに「聖徒のひとりひとりに」とあります。全体として聖徒であるだけでなく、一人一人が聖徒なのです。私たちは自分が聖徒とされたという恵みを感謝して受け止めつつ、今や「神のもの」とされた者として歩むという目標をしっかりと見定めて、召されているこの栄えある道を前進したいと思います。

次に挨拶を送る側として3種類の人たちが述べられています。最初は「私といっしょにいる兄弟たちが、あなたがたによろしくとっています。」これはローマでパウロとともにいた同労者たちのことであると思われます。この手紙の共同執筆者であるテモテがここには含まれていたでしょうし、使徒の働きからルカも一緒にいたであろうことが分かります。またピリピ書とセットで「獄中書簡」と呼ばれるエペソ書、コロサイ書、ピレモン書を参照すると、オネシモ、アリストルコ、マルコ、ユストと呼ばれるイエス、デマス、エパfras、テキコといった人々がパウロと一緒にいたことが分かります。この内の何人かもここに含まれていたかもしれません。

二つ目に22節に「聖徒たち全員が」とあります。これはパウロと一緒に挨拶を送る側の人たちですから、ローマの教会の信者たちと思われれます。彼らも「聖徒たち」と呼ばれています。どこにあっても主にある者たちは同じ「聖徒たち」なのです。

注目に値するのは三つ目に「特にカイザルの家に属する人々が」と出て来ることです。カイザルとはもちろん、時のローマ帝国の皇帝カイザルのことです。このカイザルの家に属する人々とは誰でしょうか。それはローマ皇帝の直接の家族や親戚というよりも、ローマ帝国に様々な形で仕えている兵士、役人、また奴隷たちなど広範囲の人々を指す言葉だったようです。そのようなローマ皇帝に仕える人々にも福音が語られ、さらに信者となる者が起こされていたのです。

なぜパウロはこの人たちからの挨拶を特別に記したのでしょうか。これを考える上で意味のあることはピリピはローマの植民都市であったことです。ここは退役軍人が多く住み、ローマ色の強い町でした。そのことを考慮する時、この挨拶はピリピ教会にとって少なからぬ励ましの言葉であっただろうことが分かるのです。ピリピ人は自分たちが置かれたローマ色の強い町で福音のために奮闘しています。しかし何とその福音は今や帝国の中心地、ローマのカイザルの家に属する者たちの間にまで入り込んでいます！そしてそこで信者となった者たちが自分たちに挨拶を送ってくれている！これを聞くことはピリピ人たちを大いに励まし、奮い立たせるものだったでしょう。あるいはピリピ教会の中には、かつてローマでカイザルに仕えていた者たちが含まれていたかもしれません。そうであるならこの挨拶はさらに嬉しい一言であつたに違いありません。

いずれにしても私たちはここから改めて福音の力というものを思わされます。ローマは当時の世界の支配者です。圧倒的な権威を持ち、世界の上に君臨しています。しかしそのカイザルの家に属する人々にまで福音は浸透している。このことを通して、福音はどんな種類の人々の中にも入り込むことができるのだ！どんな人でも救いへと導かれ得るのだと知って、私たちもあらゆる人々への福音宣教へと励まされたいと思います。また救われた者たちの美しい交わりについても改めて教えられます。ここには色々な背景を持つ人たちがいます。ユダヤ人もいれば異邦人もいる。一般人もいればカイザルの家に属する者もいる。奴隷もいれば自由人もいる。しかし皆、キリストにあって聖徒です。ともに「神のもの」とされた神の家族として、愛の挨拶を交わしています。私たちも当時の教会のように、神が導き入れて下さった聖徒の交わりを心から感謝し、これを尊んでいるのでしょうか。自分と同じような背景を持つ人、似たような人々とばかりグループを作り、そうでない人々を排除して聖徒の交わりを破壊していないのでしょうか。人間的な好みで聖徒の交わりを分裂・分断させていないのでしょうか。この彼らの挨拶を通して、私たちは自分のあり方を振り返り、神が導き入れてくださった聖徒の交わりを大事にし、これを一層尊ぶ歩みへ進むように、そして神に一切の栄光を帰す歩みをささげるようにと導かれたいと思います。

最後 23 節でパウロはこのように祈って手紙を結びます。「どうか、主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊とともにありますように。」 私たちはともするとこのような祈りは形式的なものとして読み飛ばしやすいかもかもしれません。しかしここまで祈りの内に手紙を書いて来たパウロが、最後の祈りを適当な気持ちで書くはずがあるのでしょうか。パウロの手紙を読み比べると、最後の祈りにはいくつかの違いがありますが、パウロはそれぞれ、それまで語って来たことの思いをすべて込めて、それらの祈りを書いたに違いありません。そういう意味で、ここにこの手紙の一切が凝縮されていると言っても過言ではないと思います。

このピリピ人への手紙の主題は、一言で言えば「喜び」でした。4 章 4 節：「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」 そしてこのメッセージをインパクトあるものにしてしているのは、何と言ってもこれを語るパウロがローマの牢屋の中にいたことです。ピリピ人はローマで鎖につながれているパウロはどうなっているかと心配して、エパフロデトを遣わし、贈り物を届けました。しかしパウロは牢の中で気落ちし、しょぼんとしていたのではなく、何と喜んでいいます。パウロはピリピ教

会に対して、この手紙で贈り物への感謝を述べるとともに、自分の近況報告をしています。そのため、この手紙は他のどの手紙よりもパウロの個人的なあかしが多く記されています。

彼は1章21節で「私にとっては、生きることはキリスト」と語りました。彼にとって生きることはイコールキリスト。すなわちキリストにあって生かされている幸いを彼は喜んでいました。また「死ぬことも益です」とも言いました。生きることも死ぬこともどちらでもOK。どちらも魅力的。個人的な観点から突き詰めて言えば、世を去ってキリストとともにいる方がはるかに良い。しかしあなたがたの信仰の進歩と成長に仕えるため、なおこの世に生きる方を選び取るというパウロの姿がありました。自分が置かれた境遇のことで頭を悩ませ、意気消沈している姿とは全く違います。むしろキリストとの豊かな交わりを楽しみ、キリストを映し出すようなパウロの姿がありました。

2章ではそのキリストの姿が示されました。神の御姿である方がご自分を無にして仕える者の姿を取り、実に十字架の死にまでも従われた。それゆえ神はこの方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりましたと。

3章では「悪い働き人に気をつけるように」という勧めの中で、キリストを知ることの素晴らしさについての彼の証しが語られました。パウロは人間的には優れた人で、「私こそ素晴らしい」という名のコンテスを開いたら一等賞を取るような人でしたが、ダマスコ途上で栄光のキリストに出会った時、それらがみなちりあくたに過ぎないことが分かりました。そしてそのキリストと結ばれ、キリストを益々知って行くことこそ、すべてにまさる喜び、また幸いであると述べました。そこでは信仰による義のこと、またキリストの復活の力に生かされつつキリストの苦しみにもあずかること、そして聖化のプロセスを経て復活の栄光に達することが述べられました。パウロはこのように自分の思いを述べました。「兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕らえたなどと考えるてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」

最後の4章では「いつも主にあって喜びなさい」と勧めつつ。「自分はどんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。私は私を強くしてくださる方によって、どんな

ことでもできるのです。どんな状況にも対処することができるのです。」と証しました。この主イエス・キリストの恵みこそ、獄中のパウロを支え、彼を大きな喜びに生かす力、また秘訣でした。

またパウロはピリピ教会にいくつかの勧めも語りました。大きく分ければ一つは教会の内側の一致についてでした。理想的なピリピ教会にもいくらかこの問題があったようです。その彼らに主のお姿を示して、同じ愛の心を持つように、心を合わせ、志を一つにするようにと勧めました。もう一つは教会外の人たちを前にして御国の民の市民生活をするということです。今や天に国籍がある天国の市民として、あるいはいのちの書に名の記されている天国人として、やがて来られるキリストを待ち望む歩みをするということです。

このためのカギとなることとして、パウロは最後に「主イエス・キリストの恵みがあなたがたの霊とともにありますように」と祈ったのです。「あなたがたの霊とともに」という表現は「あなたがたとともに」という表現と基本的には同じと考えられますが、それをより強調した言い方と考えられます。私たちは主の恵みや主の祝福を私たちのもっと外側のことに求めるかもしれません。私たちの健康が守られるように、私たちの日常生活が支えられるように、経済的に守られるように、また事業や仕事が成功するように、等々。しかしパウロは主の恵みが「あなたがたの霊とともにある」ことを祈っています。すなわち私たちの存在の中心にそれがあるように。私を取り巻く外側の事柄ではなく、私自身にあるように、その人格の最も深いところにあるように、と。

私たちはこのパウロの最後の祝祷をどう聞くでしょうか。形式的なあまり意味のない言葉だと思ったでしょうか。何かもっと違う祝福を祈ってくれる方がいいと思ったでしょうか。しかしパウロはこの手紙をここまで書いて来て、これまでの思いをこの一語にまとめて最後の祈りを書き記したのです。この主イエス・キリストの恵みを求める祈りこそ、この手紙を読んで来た私たちは、まさに自分自身のために必要な祈りとして、アーメンと心から唱和すべきなのではないでしょうか。もしそのことがぼやけて良く分からないようであれば、何度でもこの手紙を繰り返し読んでパウロの言葉に聞く必要があります。この主イエス・キリストの恵みこそ、いつも喜ぶ生活を私たちがするための秘訣です。牢屋の中に置かれた人が自分で喜ぶばかりか、外にいる人たちに向かって喜びなさいと語ることさえできる秘訣です。貧しさの中でも、豊かさの中でも、満ち足りて

歩むことができるための秘訣です。そして大きな喜びと希望を抱いて、日々、上に向かって前進し続ける歩みをするための秘訣です。私たちが牢屋の中のパウロをこのように支えた主イエス・キリストの恵みが日々、自分の霊とともにあるように祈りたいと思います。また兄弟姉妹のためにも、主の恵みが一人一人の霊とともにありますようにと執り成したい。そしていつも、またどんな状況をも乗り越えて喜び続ける幸いに生きて、このように生かしてくださる主イエス・キリストを私たちの言葉と行ないで証しする歩みへ導かれてまいりたいと思います。